

## 医療維新

## 研修医生活後は離島診療へ

## 一芸に秀でた研修医仲間との経験携え

オビニオン 2019年2月22日 (金)配信 JCHO諫早総合病院 研修医 門松 立樹

⇒JCHO尾身理事長が語る「研修医」はコチラ

門松 立樹 Ryuki Kadomatsu  
JCHO諫早総合病院 臨床研修2年目



【略歴】長崎県出身。2017年3月長崎大学医学部医学科卒業。同4月からJCHO諫早総合病院で初期臨床研修開始。2019年 4月から長崎大学病院第一内科入局し長崎県対馬病院入職予定。

私が所属するJCHO諫早総合病院のある諫早は、長崎県の中央に位置し、人口約13万人前後の中規模都市です。2022年の九州新幹線開通に向けて開発が進み、諫早駅も最近新駅舎が開業しました。そんな諫早駅から徒歩5分の場所に当院はあります。仁愛「思いやりいつくしむ心を大切に」を信念に私たちは日々の診療に当たり、初期臨床研修医は主に入院病棟の診療を担当しています。また、一部の科では初診外来を担当することもあります。私は初期臨床研修医として2年間研修する予定で、間もなく修了します。その間に実際に働いてみて感じたこと・考えたことを述べていただこうと思います。

当院全体の方針として初期臨床研修に力を入れており、特に内科系科目を内科研修医として並列にローテートするという方式が特徴的です。具体的には、消化器疾患や循環器疾患・呼吸器疾患を同時に担当することも往々にしてあります。加えて、県央の基幹病院ということで、primaryな疾患はもちろん、専門性の高い疾患も診る機会があります。各科のprimaryから専門的な疾患を並列に診ることができる当院の研修方式は、私が諫早総合病院を研修先に選んだ理由の一つでもあります。

## 総合診療医に近い医師が目標

一般的なローテート方式の研修では、それぞれの科に割り当てられる研修期間が短くなりがちで、偏った疾患しか診られないこともあります。私は自分の専門分野を修めつつ内科系疾患を幅広く診られるような、総合診療医に近い医師を目標としています。そのために最低限各科のprimary疾患を経験しておきたいと考えていました。実際に諫早総合病院で研修を始めて、幅広い分野の疾患を経験でき、理想としていた研修を行えていると思います。加えて、各科のカンファレンスがそれぞれ設けられており、自分が診ている患者さんのみならず、他の研修医が担当している患者さんも共有することができます。また、珍しい疾患や治療に難渋したような症例では上級医の先生が丁寧な解説をしてくださり、知見が広がりました。

内科系に限らず外科系科目についても積極的に指導していただけます。外科的手技や術後管理の方法などを分かりやすく教えていただき、内科に進んだとしても医師として最低限身につけておくべき技術を教えていただきました。当院では上級医の先生だけではなく、病棟・外来の看護師さん達からも指導していただけます。採血やルート確保、尿道カテーテルなどの細やかな技術的テクニックや、ともしればおろそかにしてしまいそうな患者さんの感情面への配慮など、さまざまなことを教えていただきました。他には検査技師さん、栄養士さん、etc…と、当院では研修医が学ぶ姿勢である限り、惜しみない指導をしてくださる方々が数多くいます。また、事務の方々も研修医をしっかりとサポートしてくださり、ついつい後回しにしがちな書類上の仕事でも親切に助言をくださるなど、大変お世話になっています。このように勤務してみないと分からない部分も充実しており、とても働きやすい環境であると思います。

## 一芸に秀でた研修医集団

当院の研修医は現在、1年目4人、2年目11人の総勢15人。特徴として、“少し癖のある人”が多い傾向にあります。「一芸に秀でている研修医が多い」と言う表現の方が的確かもしれません。そんなデコボコ研修医達ですが、皆仲良く助け合いながら楽しく研修をしています。研修医同士の勉強会を開いたり、医局で自然に集まって患者さんの相談をしたり、時には飲み会や遠出などもしています。雰囲気は控えめに言って最高だと思います。

つらつらと当院の良さについて語りましたが、これでも一部でしかありません。良いところを挙げればキリがありませんが、決して研修医を甘やかしているということもなく、時に厳しく、時に優しく指導して頂いています。当院で学んだことは私の今後の長い医師としての人生において土台となると思います。



当院の研修医たちと（前列右端が筆者）

### 今後の展望

私は医師3年目から、地域医療に従事する予定にしています。専門としてはリウマチ・膠原病を考えていますが、先に記載の通り、内科を広く診られる医師になるためにも一般内科医として、主に離島での診療を中心に据えていくつもりです。3年目は長崎県・対馬の医療機関で勤務する予定になりました。

よく「離島地域の医療は遅れている」などと言われることがありますが、近年は本土の病院にも引けを取らないほどに施設が充実しており、本土と変わらないレベルの医療を患者さんに提供しています。加えて、インターネット環境の普及により最新の情報も手軽に入るようになり、離島での診療に本土との隔たりを感じることは減っています。交通の便の発達により、用事があれば気軽に本土へ行けるようになっています。加えて豊かな自然があり、美味しいご飯が食べられる離島。逆に行かない理由を聞きたいくらいです。うらやましいと思った方はぜひ離島へお越しください。

### 大好きな医師という仕事

医師という仕事に就いて、改めてこの仕事の奥深さを実感する毎日です。一步間違えれば患者さんを死に至らしめてしまう可能性に戦々恐々とする一方で、死の淵から救命し得た患者さんが元気に退院していくように達成感を噛み締めています。ですが、やはり記憶に残るのは辛い思いをした経験ばかりです。特に研修医になりたての頃に経験した、診断・治療・緩和・看取りと最初から最後まで診させていただいた患者さんは、いまだに自分の対応に不足がなかったか？と顧みることがあります。そういった経験を糧とし、次につながるものとする事で感謝の意を示し続ける必要があると私は考えています。

最後に、医師の皆様は自分が医師を志すきっかけとなったことをはっきりと覚えていらっしゃいますか？恥ずかしい話、私はこれと言ってきっかけとなった逸話はありません。ただ、何となく人の役に立つのが好きだったので、一番人のためになる仕事は何か？と考えた時に思い付いたのが医師という仕事でした。割と安易な気持ちで医師を目指したので、実際になってみるとさまざまな壁にぶつかりました。

何度となく挫折して、医師を選んだことを後悔することもありました。ですが、元気になった患者さんの「おかげで元気になりました！」と笑顔で退院していく姿に何度となく励まされ、ここまでやってくることができました。日々の診療の中で、私自身にとって患者さんは数ある患者さんの中の一人になりがちですが、患者さんにとって私は今後の人生を左右し得る存在なのだと感じることもあります。そんな風思っている患者さんに自分は何ができるか？と私はいつも自問します。



人によりさまざまな答えがあるかと思いますが、大切なことはそれを考え続け、いつも心に留めておくことだと思います。私はそうして生まれた絆が仕事をする上での原動力になっています。時に報われないこともある、この医師という仕事ですが、私はこの仕事が大好きです。

⇒JCHO尾身理事長が語る「研修医」はコチラ

